知的障害のある青年の「学びの場」としての自立訓練事業の役割
―母親等を対象とする質問紙調査から―

丸　山　啓　史
（京都教育大学）

The Roles of Rehabilitation Service as “Learning Center” of Youth with Intellectual Disabilities
－Questionnaire to Mothers－

Keishi MARUYAMA

2014 年 11 月 30 日受理

抄録：本稿では、通所者の母親等を対象とする質問紙調査をもとに、「学びの場」としての自立訓練事業が果たしている役割を示した。楽しく通える居場所の確保、自信の広がり、主体性の広がり、経験の広がり、友人関係の広がり、具体的な技能の広がりなどが、通所者の変化として母親等に認識されていた。自立訓練事業について十分に肯定的な感想をもっているとはいえない母親等も少なくはないが、全体としては母親等が期待していたことが自立訓練事業において概ね実現している傾向にある。

キーワード：知的障害、青年、自立訓練事業、質問紙調査

Ⅰ．問題の所在

2006 年 12 月に国連総会で障害者権利条約が採択され、2014 年 1 月には日本も条約の締約国となった。障害者権利条約の第 24 条（教育）においては、障害のある人が排除されないインクルーシブな教育をあらゆる段階で確保することが締約国に求められており、初等教育や中等教育についての権利だけでなく、「高等教育、職業訓練、成人教育及び生涯学習を享受すること」についての権利が示されている。

国際的にみれば、知的障害のある青年に中等教育後の教育機会が広く開かれていることは珍しくない。たとえば、スウェーデンにおいては、知的障害成人学校（särvux）が存在するほか、障害のある人が国民高等学校（folkhögskola）において学ぶこともある（是永，2006、など）。また、英国においては、継続教育のカレッジで知的障害のある青年の教育・学習が行われてきている（丸山，2009、など）。しかし、日本においては、特別支援学校高等部等を卒業した知的障害のある青年について、教育・学習の機会は十分に保障されていない。

そのような状況のなか、近年では、自立訓練事業の制度を活用した「学びの場」がつくられてきている（小畑，2011）。自立訓練事業は、障害者総合支援法において「障害者につき、自立した日常生活又は社会生活を営むことができるよう、厚生労働省令で定める期間にわたり、身体機能又は生活能力の向上のために必要な訓練その他の厚生労働省令で定める便宜を供与すること」として定められているものである [1)]。基本的には 2 年が年限とされているが、3 年まで通所が認められることもある。この制度を活用して、特別支援学校高等部等を卒業した知的障害のある青年に教育・学習の機会を保障しようとするのが、「学びの場」としての自立訓練事業である [2)]。教育制度ではなく障害者支援制度に依拠していることから、「学びの作業所」「福祉事業型専攻科」などと呼ばれることもある。

このような「学びの場」としての自立訓練事業は、2008 年に和歌山県田辺市で発足した「フォレスクール」を先駆として（出口，2008）、全国各地で開設が進んできた（小畑，2012）。全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会によれば、2013 年 12 月の時点で全国に 18 か所の事業所があるとされている [3)]。また、2014 年度にも複数の事業所が発足している。知的障害のある青年に中等教育後の教育・学習の機会を保障するものとして、「学びの場」としての自立訓練事業は注目すべき取り組みになっている。

しかし、「学びの場」としての自立訓練事業が実際に果たしている役割に関して、活動紹介や実践報告等はな

されるようになってきているものの（榎本，2011；岡本ら，2013、など）、全体としての実態を整理する研究はなされていない。どのようなことが自立訓練事業に期待されているのか、どのような意義が自立訓練事業に認められているのか、どのような変化が自立訓練事業の通所者にみられるのか、自立訓練事業が果たしている役割を把握していくことが課題だといえる。

そこで、本稿では、通所者の母親等を対象とする質問紙調査をもとに、「学びの場」としての自立訓練事業が果たしている役割を示す。

通所者本人ではなく母親等を質問紙調査の対象としたのは、知的障害のある通所者本人を対象とする調査には方法的に大きな困難がともなうと考えたからである。

Ⅱ．方法

1．調査方法

2013 年 12 月に開催された第 10 回全国専攻科（特別ニーズ教育）研究集会の資料には、「学びの作業所・福祉型専攻科」の一覧が示されている。そこに記されている事業所のうち、2013 年 4 月までに開所していた 17 事業所[4]に、通所者の家族に対する質問紙の配布を依頼した。質問紙には、筆者宛ての返信用封筒を添えてもらうようにした。その結果、100 人から回答が得られた[5]。回答者の内訳は、母親が 89 人、父親が 10 人、祖父が 1 人であった。通所者が在籍している事業所は、12 事業所にわたっていた[6]。

調査期間は、2014 年 2 月から 2014 年 3 月である。

2．調査内容

調査においては、通所者の実態に関して、年齢、通所している事業所の名称、自立訓練事業に在籍している年数、中学生時に在籍していた学校・学級[7]、自立訓練事業の事業所に入所する前の所属などを質問した。

自立訓練事業への期待に関しては、「青年期をのびのびと過ごす」「安心して通える居場所をつくる」等の 13 項目について、「とても重視していた」「やや重視していた」「あまり重視していなかった」「重視していなかった」という 4 件法での回答を求めた。また、自立訓練事業についての感想に関しては、同様の 13 項目について、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」という 4 件法での回答を求めた。

通所者の変化に関しては、「自立訓練事業に通うなかで、ご本人にどのような変化がありましたか？　自立訓練事業に通って（通わせて）、よかったと思うことは何ですか？」という質問に対して、自由記述での回答を求めた。

また、自立訓練事業の課題に関して、「自立訓練事業の充実・改善について、要望はありますか？」という質問に対して、自由記述での回答を求めた。

Ⅲ．結果と考察

1．通所者の実態

通所者の年齢と在籍年数は、表 1 の通りである。通所者の 9 割近くが 19 歳から 21 歳であり、特別支援学校高等部等を卒業してすぐに自立訓練事業の事業所に入所した青年が多いことが推測される。

自立訓練事業の事業所に入所する前の所属については、表 2 の通りである。「その他」の内容

表 1　通所者の年齢と在籍年数（人）

	1 年目	2 年目	3 年目	無回答	合計
17 歳以下	1	0	0	0	1
18 歳	4	0	0	0	4
19 歳	39	5	2	0	46
20 歳	3	24	4	1	32
21 歳	1	4	5	0	10
22 歳～25 歳	0	4	0	0	4
26 歳～30 歳	0	0	0	0	0
31 歳以上	2	0	1	0	3
無回答	0	0	0	0	0
合計	50	37	12	1	100

については、「私立高校」「通信制高等学校」「高等専修学校」「大学」といった回答や、「作業所」「授産所」「生活介護」といった回答がみられる。特別支援学校高等部に在籍していた通所者が多いものの、特別支援学校以外の学校に在籍していた通所者や他の障害者支援事業所に在籍していた通所者もいることがわかる。

中学生時に在籍していた学校・学級については、表 3 の通りである。「特別支援学校」は 20 人であり、「特別支援学級」が 59 人と多い。また、「通常学級」が 16 人に及んでいる。自立訓練事業の通所者の多くは相対的に障害の軽い青年であることがうかがえる。

表 2　入所前の所属（人）

特別支援学校高等部	76
その他	20
無回答	4
合計	100

表 3　中学生時に在籍していた学校・学級（人）

特別支援学校	20
特別支援学級	59
特別支援学級と特別支援学校	1
通常学級	16
通常学級と特別支援学級	3
通常学級と特別支援学校	1
合計	100

2. 自立訓練事業についての期待と感想

自立訓練事業への期待についての回答の結果は、表 4 の通りである。また、自立訓練事業についての感想は表 5 のようになっている。

表 4 において相対的に平均値の高い項目については、表 5 において対応する項目の平均値も相対的に高い傾向がうかがえる。全体としては、母親等が期待していたことは自立訓練事業において概ね実現している傾向にあると考えられる。

次に、表 4 について、項目間で平均値を比較すると、「読み・書き・計算の力をつける」「就労に必要な力をつける」という項目は平均値が低く、「日常生活に必要な力をつける」という項目の平均値も高くない。一方で、「たくさん楽しい経験をする」「たくさん新しい体験・経験をする」「青年期をのびのびと過ごす」「人間関係を築く力をつける」といった項目の平均値が高くなっている。生活や就労のための具体的な技能の獲得・向上よりは、豊かな人間関係を築きながら多様な経験をするなかで青年期を過ごすことが重視されている傾向をみてとれる。そして、表 5 をみると、全体としては、「学びの場」としての自立訓練事業がそのような役割を果たしていることがうかがえる。

表 4　通い始めるときに期待していたこと

	とても重視していた	やや重視していた	あまり重視していなかった	重視していなかった	平均値
たくさん楽しい経験をする（n=98 人）	78	19	1	0	3.79
たくさん新しい体験・経験をする（n=99 人）	78	20	1	0	3.78
青年期をのびのびと過ごす（n=96 人）	77	16	3	0	3.77
人間関係を築く力をつける（n=99 人）	77	19	2	1	3.74
安心して通える居場所をつくる（n=99 人）	73	21	5	0	3.69
友人・仲間との関係を広げる（n=99 人）	74	19	6	0	3.69
自信や自己肯定感を高める（n=98 人）	66	23	9	0	3.58
日常生活に必要な力をつける（n=99 人）	61	34	4	0	3.58
精神的にたくましく成長する（n=99 人）	65	25	9	0	3.57
趣味・楽しみの幅を広げる（n=98 人）	48	42	6	2	3.39
就労に必要な力をつける（n=98 人）	39	32	21	6	3.06
家庭での生活が安定する（n=97 人）	33	33	26	5	2.97
読み・書き・計算の力をつける（n=98 人）	20	40	31	7	2.74

＊平均値は、「とても重視していた」を 4 点、「やや重視していた」を 3 点、「あまり重視していなかった」を 2 点、「重視していなかった」を 1 点として計算したものである。

表 5　自立訓練事業に通っての（通わせての）感想

	そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	平均値
安心して通える居場所になった（n=100 人）	86	8	6	0	3.80
たくさん楽しい経験ができた（n=100 人）	81	15	4	0	3.77
たくさん新しい体験・経験ができた（n=100 人）	77	17	6	0	3.71
青年期をのびのびと過ごせる（n=98 人）	70	22	6	0	3.65
人間関係を築く力が増した（n=100 人）	53	36	10	1	3.41
友人・仲間との関係が広がった（n=100 人）	50	31	16	3	3.28
日常生活に必要な力が増した（n=99 人）	39	48	9	3	3.24
精神的にたくましく成長した（n=100 人）	43	39	16	2	3.23
自信や自己肯定感が高まった（n=99 人）	39	45	13	2	3.22
趣味・楽しみの幅が広がった（n=99 人）	41	38	18	2	3.19
家庭での生活が安定した（n=99 人）	35	45	15	4	3.12
就労に必要な力が増した（n=99 人）	22	44	25	8	2.81
読み・書き・計算の力が増した（n=95 人）	14	38	35	8	2.61

＊平均値は、「そう思う」を 4 点、「ややそう思う」を 3 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「そう思わない」を 1 点として計算したものである。

3. 通所者の変化

(1) 楽しく通える居場所の確保

表 5 に示されているように、自立訓練事業についての感想に関して、「そう思う」という回答が最も多かった項目は、「安心して通える居場所になった」である。自立訓練事業についての感想に関する質問項目の内容が自由記述回答に影響を与えている面もあると考えられるが、通所者の変化に関する自由記述回答においても、以下のように、「居場所」という表現が用いられた回答が複数みられた。

・自分の居場所がしっかりとあり、安心して通うことが出来ました。スタッフの方の心遣いが行き届いており、たまに会に参加しますが温かいものをいつも感じ、感謝しております。／・言語障害で人と話ができない、いつも無言の息子が、自分の居場所だと認識したのか、○○（事業所名）内ではよくしゃべれるようになった。しかし○○外では以前と同じように話はできません。ガイドヘルパーさんと外出してもほとんどしゃべりません。自分の希望したところが自分の居場所だと思うことで、安心して話せるようです。他の人と話をすることで、たくさんの影響があり、青年期の大きな刺激になり、本当に良かったと思っています。／・家での生活から外への世界へと行き、居場所ができたことがうれしく思います。／・変化は特にありません。安心して通える居場所はできたのでそれだけは良かったと思います。／・自己肯定感が高まり明るく元気になりました。居場所、仲間、適切な支援でこれほど人間は変わることが出来るんだと、彼の様子を見て学びました。通所前は自分の思い通りにならない時や物など紛失した際、イライラして大声をだしパニックを起こし対応にとても困っていましたが、通ってから問題行動が減り、目立たなくなりました。○○（事業所名）へ通って優しくなりました。1 日も休むことなく元気な笑顔で、朝「行ってきます」と言って送り出す姿を見れて嬉しかったです。楽しんで通所し、安心して通える居場所でした。職員の方々の気遣いもありがたかったです。本当に良かったと思っております。／・最初の 1 年目は前向きに頑張れていた。自分の居場所と思うことができる場所であった。

また、自立訓練事業についての感想に関して、「そう思う」という回答が二番目に多かった項目は、「たくさん楽しい経験ができた」である。通所者の変化に関する自由記述回答においても、以下のように、「楽しい」「楽しそう」「楽しみ」「楽しく」等の表現が用いられた回答が複数みられた。

・まず本人が楽しく通えたこと、通うことを楽しみにしていること、また目的を持って毎日を過ごせたことがとても大きい。2 年間本当に意欲的に通うこと、楽しんだこと、家庭でも安定した精神状態で過ごすことができ、通わせて本当に良かったと思っております。何よりも本人が 1 番良かったと思っていることでしょう。笑顔あふれる毎日でしたから…。／・カリキュラムが豊かで、楽しく、青春を謳歌しており、

コミュニケーション能力がレベルアップし、人間力がついてきていると実感できる。ゆっくりたっぷり楽しい時間を過ごせていることが感じられ、幸せだと思う。／・高等養護学校の3年間は作業や実習などに追われ、楽しい学校生活というよりもいつも疲れていましたが、○○（事業所名）へ通った2年間は毎日が楽しそうで、年齢に合った青春が過ごせたと思います。本当に貴重な2年間でした。／・楽しそうです。／・友人ができ、毎日楽しく通っていることが良かったと思います。／・本人が毎日楽しく通っていること。／・○○（事業所名）に通うことを楽しみにしていた。友人もできた。／・音楽講座や写真撮影などプロの先生に見ていただいたりして、普通の生活ではできない楽しい経験や体験をさせてもらっているので、毎日いきいきと過ごしています。休日も一緒に遊びに行ける友達もできたので、通わせてよかったと思います。／・明るく元気に毎日通所している姿を見ると、本人の「今が楽しい」という言葉は本当だろうなと親としては嬉しいです。特に今まで、地元の小中普通級、私立高校に通っていたため余計にそう感じているようです。／・毎日決められた時間に起床し、しっかり通所できています。「継続は力なり」を実感しています。楽しんで訓練を受けています。興味の幅も広がっています。ありがとうございます。／・最初は毎日通えなかったですけど、徐々に気持ちの変化が現れて、今は毎日通所できるようになったこと。がんばる意欲が出てきたように思います。楽しいという言葉もあり、顔の表情・精神面も強くなったように思います。いろんな経験をさせてもらい友達とも楽しく過ごさせてもらってます。

通所者にとって自立訓練事業の場が楽しく通える居場所になっていることが回答者からも重要なこととして認識されている様子がうかがえる。上記の回答のなかにもみられるように、そのような居場所を従来は十分にもてていなかった通所者もいることを考えると、まず注目しておくべき点だといえよう。

（2）自信の広がり

自立訓練事業についての感想に関して、表 5 に示されているように、「自信や自己肯定感が高まった」という項目の平均値は 3.22 であり、他の項目に比べて高くはない。しかし、自由記述回答においては、以下のように、「自信がもてた」「自信がついてきた」といった内容の回答が多くみられた。

・少し自信のようなものが芽生えてきたように思う。少しだけ視野が広がりつつあるのかなあーと思う。／・自信がもてている。／・自分に自信が持てた。／・いろいろなことに自信を持てるようになった。／・知らない言葉や物事について質問することが多くなった（知らないことを恥ずかしいこととしなくなった）。笑顔が多くなった（自分に自信がついたのではないかと思う）。／・少しずつですが確実に自信をつけてきてるように思います。もちろん経験できたことに限られますが…。／・自分自身に自信が持てるようになった。／・行動範囲が広がり、少しずつ自信が持ててきたと思える。

このような自信の広がりが生じた理由に関わっては、以下のように、「自分の意思や行動を否定されることがない」「たくさんの経験」「公共の乗り物を使うこと」などを挙げる回答がみられる。

・自分の意思や行動を否定されることがないので自信につながり、少しは積極的になり苦手だったことも前向きになりました。それに「失敗したらどうしよう」ということもなくなりました。／・たくさんの経験が自信につながっているように思います。／・自信がついたように思います（いろいろな経験をさせていただいて）。／・絵を描くことが好きで先生に認められ、昨年個展を出すことが出来、本人もかなり自信がついたと思います。／・自分一人で公共交通機関を使って通学をすることで、自分の行動に少しずつだけど自信がついてきたように思う。／・一人でバス・地下鉄の公共の乗り物を使うことで自信がついた。

通所者の自信の広がりは、「学びの場」としての自立訓練事業の役割を考えるうえで重視されるべきことであろう。

（3）主体性の広がり

自信の広がりとも関係することとして、意思表示の広がりを通所者の変化としてとらえる回答がみられる。

・自分の意見が言えるようになった（自分に自信がもてた）。／・感情を表すようになった（行く前より、嫌なことは嫌、気に入らないなど、はっきり言うようになった）。自信がついてきたのだと思います。／・自分の思っていることを自然に話せるようになりました。少し自信がついてきたように思います。／・自分に自信を持てるようになり、自分の意思を伝えるようになりました。

自己表現や自己主張の広がりを変化として挙げる回答は少なくない。そこでは、以下のように、「自分の意思」「自分の意見」「自分の思い」「自分の感情」といった表現が用いられている。

・自分の意見や思いが少しずつ表現できるようになってきた。ゆっくりですが成長していると感じることが増えてきた。／・自分の意見をよく言うようになった。／・家庭や特別支援学校ほど手取り足取りになり過ぎない。程よく自主性に任せているところが本人を成長させているようです。クラスメイトからの刺激も一人っ子である本人にとても良い影響を与えているようです。親の思惑は別として自分の意思をハッキリ出す、表すようになりました。／・自分の思いを自分なりに相手に伝えられるようになった。／・自分の思いを出せるようになりました。／・口数が増え、自分の思いを素直に出せるようになってきています。のびのび明るく生活できるようになり、自分らしさが出てきた気がします。／・自分の感情を外に出せるようになった。

加えて、以下のように、「自分で考える」という力がついてきたことを変化としてとらえている回答もある。

・自分で考えて行動する力もついたと思います。／・困ったことがあった時など自分で考えて行動できるようになった。／・自分で考える力が少し身についたように思う。例えば、通うための交通状況の中で、時には行きや帰りの電車の遅れなど出た場合、どうしたら良いかなど、経験も含めて対応できるようになってきた。／・自分で考え決定する力が成長した。／・自分で考えるようになったこと。

また、日常生活において必要なことを自分でするようになったという回答も少なからずみられる。

・自分の事は自分でするという意識が強くなった。／・自分のことは自分でするようになった。／・自分で買い物を自主的にするように変わった。／・身の回りのことは全て自分でできるようになり、服装も自分で買い選ぶようになった。／・自分で天気予報を見て翌日の服を自分で決めて準備するようになった。／・連絡帳などがないことで自分の必要なことは自分でと責任感も少し出てきたような気が。

このように、自分で考えて行動したり、他者に意思表示したりするなど、通所者がより自立して自らの生活をつくっていくようになっている様子が自由記述回答において示されている。主体性の広がりともいえる変化が、母親等によって認識されているのである。

(4) 経験の広がり

自立訓練事業のよい面として、様々な経験の広がりを挙げている回答も少なくない。表5をみても「たくさん新しい体験・経験ができた」という項目は3番目に平均値の高い項目になっているが、自由記述回答においても以下のような回答がみられる。

・いろいろな体験ができた。／・良かったこと―みんなで様々な体験をし、失敗をしたり、悩んだりしながら共に成長できたことです。／・色々な経験ができたこと。／・家庭だけではできない多くの経験ができて、行ってよかったと思っています。／・作業所だけでは味わえないであろう、いろんなことを経験できて良かったと今では思います。／・たくさんの新しい友人との新しい体験、経験ができたこと。／・たくさんの新しい体験・経験ができるようになってから、いろんなことに意欲が出てき、前向きに考えるようになったように感じます。

ただし、質問紙調査の自由記述回答においては、「体験」や「経験」の具体的な内容はほとんど記されていない。どのような体験・経験が価値あるものとして評価されているのか、本調査から把握することには限界がある。「学びの場」としての自立訓練事業の充実を考えるうえでは、価値あるものとされる体験・経験の内実を探究する必要があろう。

(5) 友人関係の広がり

友人関係の広がりに言及する自由記述回答が多かったことも、注目すべき点であろう。以下のように、同年代の友人との関係が築かれていることを肯定的にとらえる回答が多くみられる。

・友達もたくさんできました。／・何よりも友達と楽しく活動できることが一番ありがたいことです。／・友達との関係が広がった。集団から外れがちな面があったが、集団の中で安心して自分を出し、楽しむようになった。／・友人関係を作れるようになった。／・友人との関係が広がった。／・青年期を友人と過ごせて健常者と同じように楽しめた。／・学校の時とは違う、友人の大切さも少しわかってきたように思う。／・同年代の仲間と共に過ごすことができる。／・同年代の人との関わりができたこと。

また、友人と行動・活動をともにするようになったことをよかったこととして考える回答も少なくない。そのなかには、親とではなく友人と行動・活動するようになったことを肯定的に価値づけるような回答もみられる。

・友人とお昼休みにランチに出かけることが出来た。／・クラスのみんなとカラオケやボーリングに行くことで、友達と外で活動する楽しみを味わうことが出来て良かった。／・同年代の友達との関わりが一番刺激になっているようです。地下鉄は怖くて乗れなかったが友達と一緒に帰りたいという思いから、今では一人で乗ることが出来るようになりました。帰り、駅でみんな一緒にジュースを飲んだり、最近は「20歳になったら」が流行っているようで、家でも「20 歳になったら」カードを作ってほしいとか、病院は一人で行くなど言うようになりました。／・休日も一緒に遊びに行ける友達もできたので、通わせてよかったと思います。／・放課後仲間と寄り道ができるようになった。親と過ごす事よりも友人と過ごす事が多くなった。／・親とは外出せず、友達と外出を希望するようになった。（中略）仲間の存在を強く意識するようになった。全て親としては望んでいたこと、嬉しいかぎりです。

通所者が友人関係を広げる場となること、知的障害のある青年が親から自立して人間関係を形成していく契機となることが、「学びの場」としての自立訓練事業の重要な役割として考えられる。

(6) 具体的な技能の広がり

通所者本人の変化として、具体的な技能の広がりを記している回答も少なくはない。たとえば、以下のように、交通機関の利用に言及している回答が多くみられる。

・高等養護学校時代には考えられなかった一人通勤（？）、しかも片道 1 時間半の施設へ、バス→地下鉄→（のりかえ）地下鉄→徒歩ができるようになった。迷子になったり居眠りをして乗り過ごした時もあわてずに周囲の人に助けを求めたり、親に連絡して指示を求めることが出来るようになり、自信をつけた。／ひとりで電車、バスなど自信を持って利用することが出来るようになった。／・行動範囲が広がり一人でバスや電車に乗って出かけることが増えました。行く場所もインターネットなどで見て調べたりして自分で決めていけます。／・電車に一人で乗ったことがなかったが、通学に一人で乗って帰ってくることが出来るようになった。

ほかにも、料理、買い物、パソコンの操作、服装への配慮など、できるようになったことや力量の向上したことを具体的に示す回答がみられる。

・一人でバス・地下鉄の公共の乗り物を使うことで自信がついた。友人とお昼休みにランチに出かけることが出来た。地下鉄を利用するので街（若い同世代の子のファッション）の刺激を受け、服装を気にするようになった。色々な社会的マナー、急いでいる人が後ろから来たらよける等。／・身だしなみに気を使うようになった。／・買い物ができるようになった。／・家で料理をし、後片付けもきちんとする力を身に付け、言葉遣いも少しずつですがよくなってきています。／・銀行でキャッシュカードが使えるようになりました。パソコンを操作できるようになりました。携帯で連絡してくるようになりました。／・パソコンの入力、文章力がついた。

具体的な技能の広がりは、通所者の生活の充実につながり得るものであり、重要なことといえる。しかし、具体的な技能の広がりを通所者の変化として挙げる回答は、全体としては必ずしも多くはない。質問紙調査においては、自信の広がりや主体性の広がりなど、人格的な成長・発達といえる面での変化に関する回答が多くなっている。

4. 自立訓練事業についての評価の幅

ここまでみてきたように、質問紙調査の結果を全体としてみると、自立訓練事業について肯定的な評価をしている回答者が多い。しかし、回答者のなかには、自立訓練事業について肯定的とはいえない評価をしている人もいると考えられる。

自立訓練事業に対する母親等の期待や感想の在りようを検討するため、自立訓練事業への期待に関して、「とても重視していた」を 4 点、「やや重視していた」を 3 点、「あまり重視していなかった」を 2 点、「重視していなかった」を 1 点とし、各項目の得点を合計して、回答者ごとに「期待得点」を求めた。また、自立訓練事業についての感想に関して、「そう思う」を 4 点、「ややそう思う」を 3 点、「あまりそう思わない」を 2 点、「そう思わない」を 1 点とし、各項目の得点を合計して、回答者ごとに「評価得点」を求めた。欠損値のあった回答は無効としている。

表 6 は、「期待得点」と「評価得点」の状況を示したものである。また、表 7 は、「評価得点」と「期待得点」

の差の状況を示したものである。表 6 をみると、大半の回答者の「期待得点」が 37 点～52 点となっているのに対し、「評価得点」は回答者の間でややばらつきがあり、36 点以下の回答者も 15 人に及んでいる。また、表 7 をみると、「期待得点」より「評価得点」が 11 点以上低い回答者が 12 人いることがわかる。

自立訓練事業に対して多くのことを期待しながらも十分に肯定的な感想をもっているとはいえない回答者が少なくはないことがうかがえる。

表 6　「期待得点」と「評価得点」（人）

	期待得点	評価得点
49 点～52 点	31	22
45 点～48 点	22	24
41 点～44 点	23	15
37 点～40 点	12	15
33 点～36 点	4	6
29 点～32 点	0	4
25 点～28 点	1	3
21 点～24 点	0	2
13 点～23 点	0	0
無効等	7	9
合計	100	100

表 7　「評価得点」と「期待得点」の差

「評価得点」－「期待得点」	人数（人）
16 点～20 点	1
11 点～15 点	4
6 点～10 点	4
1 点～5 点	19
0 点	11
－5 点～－1 点	24
－10 点～－6 点	11
－15 点～－11 点	7
－20 点～－16 点	3
－25 点～－21 点	2
無効等	14
合計	100

5. 自立訓練事業の活動内容についての要望

自立訓練事業について十分に肯定的ではない感想をもつ回答者がいることに関わって、自立訓練事業の要望のなかから活動内容に関するものをみると、以下のように、読み・書き・計算についての要望が複数みられる。

・読み書き計算、読書する時間があればよかった。／・自ら勉強を進めることができない子にもっと学習を手伝うべきだったと思う。高等部でできていた読み書き計算がむしろできなくなっている。／・読み書き計算は毎日少しの時間でもいいので続けてほしいです。／・読み書き計算がやりたい（今より）と言っています。毎日ではなく、今週分で 5 枚とか宿題があると嬉しい。

また、就労に向けた取り組みの充実を望む回答も少なくない。

・就労につながるといいな…と思います。なかなか一般就労にはつながらないのでは…と不安があります。障害も軽度であり、卒業後作業所では生活が不安です。／・学生生活的なイメージの方が大きく、就労の具体的な内容また実習をもう少し多く取り入れていただけたら…と思います。／・次の仕事などにつながることをもっと力を入れてもらいたい。／・1 年間自分で一つのことを学び、みんなの前で発表することは素晴らしいことですが、それプラス今後社会に出るための挨拶や報告の仕方や連絡の仕方なども学んでほしいと考えます。／・就労に必要な力を身に付けるためにも、きちんと具体的な目標を持って 3 年間を過ごすべきだったと思っています。

このことに関連して、以下のように、卒所後の進路が母親等の期待とは異なっていたことをうかがわせる回答や、「自立訓練事業の延長線上での就労への取り組み」への関心を示す回答がみられる。

・子どもにとってこの 3 年間は大変有意義な毎日だったと思います。ただ 1 つ、もう少し修了後の就労先に関しての行き先に期待していたが、残念でした。／・自立訓練事業の延長線上での就労への取り組みを検討されておりましたら、大変興味があります。本人の将来に向けて選択肢が増えると思われます。就労は人間的成長の場であり、可能性を高められたらよいと考えます。

表 4 に示されているように、「読み・書き・計算の力をつける」「就労に必要な力をつける」といったことは、全体としてみれば、「学びの場」としての自立訓練事業に強く期待されていることではない。表 5 に示されているように、「読み・書き・計算の力が増した」「就労に必要な力が増した」という感想をもつ母親等は相対的に少ないが、自立訓練事業への期待の在りようを考えると、そのことは必ずしも問題とされるべきことではないのかもしれない。

しかし、母親等のなかには、自立訓練事業について、読み・書き・計算の学習や就労に向けた学習を期待している人もいることがわかる。

Ⅳ．まとめ

榎本（2011）は、自立訓練事業「フォレスクール」について、「日常・社会生活能力を身につけるとともに、社会・他人との関わりを通して、仲間とともに楽しく、ゆっくり、じっくりといろんな経験をして、自信のもてる自分づくりをしていこう、という大きな柱を立てることにしました」（p.37）と述べ、「目に見えるスキルアップ」の前に「青春を大いに楽しみ、仲間との関わりの中で自分を見つけ、新しい自分をつくっていくという、内面を豊かにしていくことが大事です」（p.38）としている。また、岡本ら（2013）は、自立訓練事業「エコール KOBE」の「実践の三つの柱」として、「ゆたかな体験」「主体的に学ぶ」「仲間とともに」を挙げている（pp.11-13）。そして、丸山（2014）は、自立訓練事業「プエルタ」について、「生活に必要な力をつけることだけでなく、それぞれが好きなことや楽しめることを見つけていくこと、他者と関係を築く力を広げること、誰かに相談したり頼ったりできる信頼感や安心感を育むこと、生活のなかでの主体性を高めることなどが目指されている」（pp.192-193）として、「仲間づくりの場としての役割」を重要なこととして強調している。

このような方向性が「学びの場」としての自立訓練事業において全体としては概ね共有されているらしいこと、そこで想定されているような役割を自立訓練事業が実際に果たしている面のあることが、質問紙調査からうかがえる。

質問紙調査においては、「学びの場」としての自立訓練事業における通所者の変化について、交通機関の利用、パソコンの操作、買い物など、具体的な技能の獲得・向上を挙げる回答もみられた。しかし、全体としては、能力の発達や技能の獲得よりも、自信や主体性といった人格的な豊かさの広がりに着目した回答が多かった。また、楽しく通える居場所において様々な経験をすること、友人関係を広げていくことなどが期待される傾向がみられ、それらのことが実現している例も多いことが質問紙調査からうかがわれた。

ただし、「学びの場」としての自立訓練事業のどのような側面が通所者の変化につながっているのか、本調査から十分に把握することはできない。自立訓練事業に通所したことが変化の理由であるのかどうかも、明らかではない。「学びの場」としての自立訓練事業の在り方を考えていくうえでは、肯定的な変化が通所者にみられるようになる要因の探究が課題だといえる。具体的な実践の在りようを通所者の変化と関連づけてとらえるような、実践に関する研究が求められる。また、「学びの場」としての自立訓練事業であることを自認しない自立訓練事業を含め、知的障害のある青年が通う他の施設・事業との比較のなかで「学びの場」としての自立訓練事業の役割を把握することも重要であろう。「学びの場」としての自立訓練事業が果たしている役割の独自性を、他の施設・事業が担う役割との共通性と合わせて明らかにしていくことが必要である。

また、「学びの場」としての自立訓練事業に対して十分に肯定的とはいえない感想をもつ母親等が存在していることも、注目しておくべき点である。通所者が自立訓練事業に入所することを積極的に選択している母親等が多いと推測されるにも関わらず、自立訓練事業に対して相対的に否定的な感想をもつ母親等が少ないとはいえないのである。そのことの理由を明らかにしながら、「学びの場」としての自立訓練事業の在り方を検討していくことが、今後の課題として重要だといえる。

自立訓練事業の活動内容への要望のなかには、読み・書き・計算の学習や就労に向けた学習の充実を望む意見がみられた。このような要望をどうとらえるのかは、「学びの場」としての自立訓練事業をめぐる重要な論点の一つであろう。通所者本人の要求と母親等の要望とが異なる可能性もある。また、読み・書き・計算の学習や就労に向けた学習の強調は、楽しく通える居場所の創造や自信や主体性を広げる活動と親和的であるとは限らない。

しかし、読み・書き・計算の学習や就労に向けた学習は、知的障害のある青年にとって不要なものではない。交通機関の利用、パソコンの操作、買い物など、日常生活に役立ち得る具体的な技能の広がりも、追求される価値のあるものである。質問紙調査においては具体的な技能の広がりを通所者の変化として挙げる回答は多くなかったが、「学びの場」としての自立訓練事業に対する多様な要望をふまえながら、自立訓練事業における活動内容の在り方を検討していく必要がある。

なお、「学びの場」としての自立訓練事業が果たしている役割をより具体的・多角的に明らかにしていくことも、今後の課題だといえる。本稿は、母親等を対象とする質問紙調査に基づくものであり、そのことによる限界を含んでいる。自立訓練事業が果たしている役割を十分に把握するためには、通所者本人や職員を対象とす

る調査が必要であるし、具体的な実践についての研究の蓄積も重要になると考えられる。

注

1）障害者総合支援法が施行されたのは 2013 年 4 月であり、それ以前は、自立訓練事業は障害者自立支援法に規定されていた。
2）本稿において「『学びの場』としての自立訓練事業」とするもの以外に、自立訓練事業の事業所は多く存在している。
3）2013 年 12 月に開催された第 10 回全国専攻科（特別ニーズ教育）研究集会の資料を参照。
4）そのうち 1 事業所は、依頼の電話をした 2014 年 2 月の時点において、通所者が 0 人であった。
5）本調査と同時に、事業所を対象とする質問紙調査を実施した。それに対して回答のあった 11 事業所の通所者の合計は 154 人である。このことをふまえると、本調査の回収率は低くないと考えられる。
6）在籍している事業所の名称について回答がなかったのは 5 人であった。
7）高等学校には特別支援学級がないため、後期中等教育に関しては、知的障害のある子どもの多くが特別支援学校高等部に通うことになる。自立訓練事業の通所者の知的障害の程度を推定するために、高校生時に在籍していた学校・学級ではなく、中学生時に在籍していた学校・学級について質問した。

参考文献

出口幸三郎（2008）「学ぶ作業所 フォレスクール」全国専攻科（特別ニーズ教育）研究会編『もっと勉強したい！』クリエイツかもがわ、pp.92-94。
榎本恵理（2011）「『フォレスクール』ですごす 2 年間」『みんなのねがい』2011 年 7 月号、pp.36-38。
小畑耕作（2011）『ひろがれ！ 学びの場―障害者にゆたかな青年期を』全障研出版部。
小畑耕作（2012）「『学びの場』づくりは何をめざしているのか」『みんなのねがい』2012 年 3 月号、pp.32-35。
是永かな子（2006）「スウェーデンにおける 20 歳前後の障害者教育制度」『障害者問題研究』第 34 巻第 2 号、pp.63-69。
丸山啓史（2009）『イギリスにおける知的障害者継続教育の成立と展開―青年・成人教育の機会拡大とカリキュラム開発』クリエイツかもがわ。
丸山啓史（2014）「障害のある子ども・青年の学びと地域づくり」片岡了・辻浩編『自治の力を育む社会教育計画』国土社、pp.182-196。
岡本正・河南勝・渡部昭男（2013）『エコール KOBE の挑戦』クリエイツかもがわ。
渡部昭男（2009）『障がい青年の自分づくり―青年期教育と二重の移行支援』日本標準。